

日本で文化財を保存してゆく上で、一番問題になるのが「カビ」そして「虫」です。江戸時代、江戸の大火は有名ですが、その頃ですら貴重本が失われる原因は「火事」よりも、これら生物被害によるものが多かったと試算されています。



↑カビ

美術館でもカビ処理は非常によく行う作業です。文化財によらずカビの生えた物の最初の処置はよく乾燥させることですが、文化財の場合、やみくもに乾燥させるとひび割れなど違う弊害が起こります。ただ幸いにして文化財によく使用される素材の保存適正湿度は、カビの発育適正湿度より、ほとんどが低いので、まずはその素材の保存適正湿度に馴染ませてやります。そうすると生えたカビは非常にもろい状態になり、少しの衝撃でも粉砕されるようになります。そういう状態にしてから乾式クリーニング、つまりカビ払いを行います。



↑カビ払いの様子

筆で払ったり布で拭いたりといった作業ですが、私たちはちょっとした作業に学童用の化繊の筆をよく使います。化繊の筆は乾燥した状態でこすられると静電気が起きやすいので、孢子などが筆側にひっついてくれるからです。このように先を様々な形状に自分でカットして使います。



↑カビ払いで使用する化繊筆

小さいものと修復室のフーパの下で行いますが、大きい物はそういうわけにはいきません。これはあくまで殺菌処理ではないので、飛び散った孢子などを吸い込まない様、作業をする職員もマスクをし、

ひどいものは白衣を着て作業をします。またしょっちゅうクリーンルーム用の掃除機でまわりを掃除しながらの作業になります。



↑ 白衣とマスク



↑ 掃除機がけの様子

余談ですが、お着物などに茶色いシミが、「そばかす」というか「ジンマシン」の様に出てきてしまったというご経験はありませんか？一般には「ほし」とかとも呼ばれ、私たちは専門用語として「フォクシング (foxing)」と呼んでいます。あれの原因もカビであることが非常に多いのです。あまり知ら

れていないことですが、実際にカビが生え出してから、あの「シミ」が出るまでには結構、長い時間（環境にもよるが年単位）が必要です。タンスを開けて少しでも「カビ臭いなあ」と感じたら、すぐ良く乾かして乾式クリーニングを行って下さい。今ではお着物用のブラシなども市販されているようですが、柔らかい毛のものでしたら刷毛のようなものでも使えます。あの「シミ」は一度出来てしまったら、ほとんどの場合、染み抜き出来ません。出来ないばかりか、時として分泌されたものによって次の染め替えの邪魔をする、実に厄介者です。

昔の日本人の暮らしに「虫干し」という行事は欠かせないことでした。近年、「虫干し」という年中行事も科学的な裏づけがされ、その有効性が再認識されてきています。「虫干し」にはいろいろな類語があるのですが、その中に「目通し、風通し」という言葉があり、まさしく「虫干し」のメカニズムを言い表した言葉だと言えます。上記 Foxing などの症状を予防するにも、この「目通し、風通し」が一番有効なのです。

美術館の収蔵庫は温湿度管理がされ、いわゆる四季のない空間なのですが、早期発見、早期予防はしっかり継承しなければならないことです。みなさんも自分にとっての宝物は、時々取り出し、眺め、慈しんでやって下さいね。

(N. N.)